

Yame
八女市内遺跡群 2

福岡県八女市新庄所在遺跡の発掘調査報告書

八女市文化財調査報告書 第105集

2014

八女市教育委員会

八女市文化財調査報告書 第105集

Yame
八女市内遺跡群 2

福岡県八女市新庄所在遺跡の発掘調査報告書

八女市文化財調査報告書 第105集

2014

八女市教育委員会

序

八女市の西南部、筑後市と境を接する新庄地区には弥生時代から中世にかけての遺跡が現在も数多く存在しており、これまでも数多くの遺跡において発掘調査が実施されていますが、本格的な発掘調査の開始は圃場整備の歴史とともに始まります。

昭和 50 年代後半からはじまった八女南部圃場整備事業を発端とし、福岡県教育委員会や八女市教育委員会が主体となって調査が行われ、弥生・古墳時代の集落や墳墓が多数発見されました。この事実は、当地区の真の歴史の深さを雄弁に物語るものであると確信しております。

中でも昭和 62 年に発見された中里遺跡は、当時全国的にも珍しい、くびれ部分を有する方形環濠であり、全体の形が前方後方形とも考えられる極めて希有な遺跡として脚光を浴びました。

近年の調査、研究においては、古墳時代前期ごろに出現する「豪族居館」の前進ではないかとの論調も見出されるようになり、中里遺跡を含めた周辺の遺跡に対し様々な角度から再検討が必要となる時期が来ているものと思われます。

今回の報告は昭和 60 年から同 62 年に行われた発掘調査の概要報告について再検討を行い、より精度の高い情報を公表することで地下に埋没している遺跡に対する深いご理解をいただくことを目的としております。

この報告書が今回公表させていただきました遺跡のみならず、市内に数多く点在する文化遺産を深く理解する一助となり、今まで以上の文化財愛護の心をはぐくむことに寄与できるのであるならば幸甚の極みであります。

最後に当該遺跡の発掘調査に格段のご理解をいただきました関係各位、および地元の皆様方には並々ならぬご協力と応援を頂きました。

深くお礼を申し上げますとともに、今後の文化財行政につきまして、これまで以上の温かいご声援を賜われますよう重ねてお願い申し上げます。

平成 26 年 3 月 31 日

八女市教育委員会

教育長 西 島 民 生

例 言

- 1 本書は、八女市教育委員会が国・県の補助を受けて実施している八女市南部地区県営ほ場整備事業に伴う発掘調査の再整理調査報告書である。
- 2 発掘調査は八女市教育委員会が主体となって実施しており、平成元年に概報が発行されている。
それによると、
吉書田遺跡の発掘調査は昭和62年7月1日から平成62年8月7日に行っている。
水町遺跡の発掘調査は昭和62年7月28日から昭和62年9月8日に行っている。
大石本遺跡の発掘調査は昭和62年11月4日から昭和62年11月14日に行っている。

本報告に伴う整理作業は平成25年度に行った。
- 3 発掘調査で検出した各遺構は、その種類ごとに記号を付し、竪穴住居をS B、溝状遺構をS D、柵列状遺構をS A、不明遺構をS Xと表記した。
- 4 本書に使用した測量図の浄書及び出土遺物の実測図作成・浄書は岩戸山歴史資料館において行った。
- 5 本書に使用した出土遺物の撮影については永田が行った。
- 6 本書使用の方位については、すべて磁北である。
- 7 本書の執筆、及び、編集については永田が行った。
- 8 本書に関する調査記録、及び、出土遺物は現八女市の岩戸山歴史資料館において保管・収蔵している。

本文目次

1 調査の経過

- (1) 調査に至る経過
- (2) 調査体制

2 遺跡の立地と歴史的環境

3 調査の内容

- A 発掘調査の概要
- B 調査
 - 1) 遺構と出土遺物

4 まとめ

図版

図版 1 ～ 1 1

插图目次

- 第 1 图 周边遺跡分布图〔1／25, 000〕
- 第 2 图 吉書田遺跡・水町遺跡・大石本遺跡調査位置图〔1／2, 500〕
- 第 3 图 吉書田遺跡 1 地点 遺構配置图〔1／300〕
- 第 4 图 吉書田遺跡 1 地点 1 号竪穴住居〔1／40〕
- 第 5 图 吉書田遺跡 1 地点 2 号竪穴住居〔1／40〕
- 第 6 图 吉書田遺跡 1 地点 3 号竪穴住居〔1／40〕
- 第 7 图 吉書田遺跡 1 地点 1 号溝状遺構断面图〔1／40〕
- 第 8 图 吉書田遺跡 1 地点 7 号・8 号溝状遺構断面图〔1／40〕
- 第 9 图 吉書田遺跡 1 地点 1 号竪穴住居出土土器実測图〔1／3〕
- 第 10 图 吉書田遺跡 1 地点 2 号竪穴住居出土土器実測图〔1／3〕
- 第 11 图 吉書田遺跡 1 地点 3 号竪穴住居出土土器実測图〔1／3〕
- 第 12 图 吉書田遺跡 2 地点 遺構配置图〔1／300〕
- 第 13 图 吉書田遺跡 2 地点 1 号柵列状遺構〔1／60〕
- 第 14 图 吉書田遺跡 2 地点 10 号・11 号・12 号溝状遺構断面图〔1／40〕
- 第 15 图 吉書田遺跡 2 地点 13 号・14 号溝状遺構断面图〔1／40〕
- 第 16 图 吉書田遺跡 2 地点 15 号溝状遺構断面图〔1／40〕
- 第 17 图 水町遺跡 遺構配置图〔1／300〕
- 第 18 图 水町遺跡 1 号溝状遺構土層图〔1／40〕
- 第 19 图 水町遺跡 2 号溝状遺構断面图〔1／40〕
- 第 20 图 水町遺跡 出土土器 実測图〔1／3〕
- 第 21 图 大石本遺跡 1 地点 遺構配置图〔1／300〕
- 第 22 图 大石本遺跡 1 地点 1 号溝状遺構断面图〔1／40〕
- 第 23 图 大石本遺跡 2 地点 遺構配置图〔1／300〕
- 第 24 图 大石本遺跡 2 地点 2 号溝状遺構断面图〔1／40〕
- 第 25 图 大石本遺跡 2 地点 3 号溝状遺構断面图〔1／40〕
- 第 26 图 大石本遺跡 出土土器実測图〔1／3〕
- 第 27 图 大石本遺跡 P-26〔1／2〕

I 調査の経過

A 調査に至る経過

昭和57年度を初年度として八女南部地区において実施された県営圃場整備事業は、一級河川である矢部川から山ノ井川までの地域約209haを整備する事業として計画された。初年度以降においては順次北方地域に向け、毎年20ha程度雄の事業が実施された。事業開始期である昭和57年から同59年においては矢部川にほど近い川犬地区を中心として整備が行われた。当該地区は矢部川の氾濫原として考えられていたため、埋蔵文化財においては包蔵無しとされていた。

昭和60年には新庄地区が事業地となり、八女市教育委員会と福岡県南筑後教育事務所が共同で現地の遺跡分布調査を実施したところ、下新庄集落の南側一帯に多量の土器片が確認された。これを受け、八女市教育委員会、福岡県教育委員会、八女南部土地改良区の三者で協議を行い、遺跡の広がり調べるために試掘調査を実施した。その結果、弥生時代から古墳時代にかけての住居跡と考えられる遺構や多数の甕棺墓が発見され、遺跡全体の広がりには相当な範囲に及ぶことが推測された。試掘調査の結果を踏まえ、八女市教育委員会では国庫補助事業として発掘調査を実施することとなり、昭和60年7月15日より現地での調査を開始した。

これ以後、圃場整備実施予定地となった地区においては事業前年度に試掘調査を実施し、事業地内の埋蔵文化財の在り方について把握を行い、関係各機関と協議を行いながら連携を重ね、圃場整備により削平・掘削が実施される部分を中心に毎年発掘調査を実施した。これ以外については遺跡保護の観点から現状保存の策が採られた。

B 調査体制

【昭和62年度】（現地調査時）

〔調査主体〕 八女市教育委員会

教育長	坂 田 不二夫
社会教育課長	平 嶋 敏 章
同 課長補佐	杉 山 信 行
同 係員	梅 野 満
	平 田 高 義
	平 嶋 芳 子
	赤 崎 敏 男（調査担当）
嘱託	鹿 田 昌 宏（11月より）

八女南部土地改良区

理事長	川 口 一 男（8月まで）
	角 實 雄（9月から）
事務局 長	政 次 春 男
事務局 次長	栗 原 昭
事務局 員	金 納 三枝子

福岡県教育委員会南筑後教育事務所

技術主査 川 述 昭 人

福岡県筑後川水系農地開発事務所

工事第一課第二係係長 田 中 耕 三

技師 秋 山 勝 年

中 村 健 一

【平成 25 年度】（報告書作成時）

〔調査主体〕 八女市教育委員会

教育長 西 島 民 生

教育部長 井 上 俊 裕

文化課長 井 上 秀 樹

同 参事補佐 北 島 一 雄

同 文化財係長 大 塚 恵 治（総括報告担当）

同 係員 永 田 寧（本報告担当）

同 係員 渡 部 真 弓

同 文化振興係長兼文化財係主任

中 川 寿賀子（報告担当）

II 遺跡の立地と歴史的環境

【地理的環境】

八女市は平成 22 年 2 月 1 日に八女郡に所在していた立花町、黒木町、星野村、矢部村の 2 町 2 村と合併し、福岡県下で 2 番目に広い行政区域を持った新たな「八女市」としてスタートする事となった。

現在、西を筑後市、東を大分県日田市、南を熊本県山鹿市と接する広大な県境の自治体となり、多様な生産活動が見られる希有な行政体となっている。東の山間部では杉やヒノキを中心とした林業が盛んであり、その地形を巧みに利用した文化的景観としての棚田も多数みられる。また、中山間部においては地域の気象条件の恩恵を受け、高級茶葉である玉露や良質な巨峰などの生産が盛んに行われている。平野部では福岡県産の苺の主力である「あまおう」や梨、電照菊などを生産している。

これらの生産活動を可能にしている立地は、耳縄山地と福岡・熊本両県を区する筑肥山地により「コ」の字状に囲まれ、大分県との境にそびえる釈迦岳山地に源を発し有明海に向け西流する一級河川である矢部川が形成したものである。流域面積 647 m² を誇る福岡県下第 3 の大河であり、古来より水上運搬に供され現市域で行われた産業すべての要であった。

しかしながら、時代の流れとともに八女市内で生産される文物の大半は陸上輸送に徐々にシフトし、いまでは水上輸送手段はほぼ皆無となっている。

現在の交通事情を概観すると、八女市内には大分県まで延びる国道 442 号線が東西に走り、交通量の増大に比例しバイパス道路の建設・開通も急ピッチで進んでいる。また、西部地区には九州の大動脈である国道 3 号線や九州縦貫自動車道が南北を貫いており、八女西部地区はまさに九州のクロスロード的な性

格を持っている。

【歴史的環境】

吉書田遺跡、水町遺跡、大石本遺跡は福岡県八女市新庄に所在する。

当該地は古くから弥生時代から古墳時代、歴史時代を中心とした埋蔵文化財が数多く存在している地区として知られ、大規模な圃場整備事業の実施に伴い、弥生時代中期に属する集落の大規模遺跡や墳墓群の発見があった。また、同時に中世の遺跡群も発見され、当地区における埋蔵文化財の概要が明らかになってきた。いかに八女市西部における概要を記し、当遺跡を理解する一助としたい。

（概要）

八女市西部における遺跡の初現期は縄文時代前期まで遡ることができ、国武遺跡群や平田遺跡群等では押型文土器が数多く出土している。後期に入ると南西部のアモメ遺跡において小規模な円形の竪穴式住居や、少数ながら墳墓がみられるようになり、移動狩猟採集生活から定住化の兆しがみられるようになる。

弥生時代に入ると、立野・大坪遺跡や亀ノ甲遺跡、宿町遺跡等の前期後半の環濠遺跡が出現する。なかでも亀ノ甲遺跡の環濠は推定直径200mを超える大規模なものであり、全容はとらえられていないが環濠集落的な要素を持つ遺跡である。市内ではいまだ当時期にかかる本格的な稲作関連遺跡は発見されていないが、稲作と環濠遺跡はセット関係になることが多く、これらの遺跡の出現期にはすでに稲作が導入、または定着していたものと考えられる。中期に入ると、これまで見られた様相とは異なった状況が展開する。中期前半から中頃にかけては竪穴住居が散発的にしか存在しなくなり、環濠のように大規模な遺構は全く確認できないようになる。ところが中期後半ごろになると、六反田遺跡のように大規模な集落域と墳墓域がセットになって出現するなど、再び大規模な土木工事を伴う大集落形成の萌芽がみられるようになる。また、前述した立野・大坪遺跡などから鉄器が出土するようになるなど、その普及と前後し、変化の著しい時代様相の到来が看取できる。後期に入ると、各地で大規模な集落が形成されるようになる。室岡地区に所在する野口遺跡や道添遺跡、室岡工業団地内遺跡では鉄器や砥石が出土している。矢部川に面した南部地区では現在のところ大規模集落は発見されていないが、アモメ遺跡では非常に密集度の高い貯蔵穴群が発見されており、近くには墳墓群も存在することから、近接した区域に大規模な集落が存在するものと思われる。また、同地区内に所在する茶ノ木ノ本遺跡の甕棺墓群からは方格規矩鏡、深樋式銅剣、鉄戈が出土しており、これらの事象は在地有力者の台頭とともに、大規模集落同士の統合が進んでいることを連想させる。

これと時をほぼ同じくして室岡台地上に所在する亀ノ甲・山ノ上周辺においても土地利用が再開し、地形を人為的に開削し前代とは比較にならないほどの大環濠集落を形成する。西山ノ上遺跡や国道442号線バイパス建設関係の遺跡群がこれに該当し、特に前者においては原始鍛冶の痕跡とともに多量の鉄片、大陸由来の鑄造鉄斧片などの当時最先端の鉄素材が多量に出土するなど、一気に弥生時代における全盛期を迎える。しかしながら、西山ノ上遺跡がみせるように後期後半～末頃にかけて鉄素材を投棄したり、居住域を大幅に縮小する傾向がみられる。原因は定かではないが、瀬戸内地区で多く見られる高地性集落の発生時期と重なるところもあり、注意すべき点と思われる。

古墳時代に入ると、地域的な隔たりはあるものの、北部丘陵上（以下、八女丘陵）では4世紀前半ごろから5世紀前半にかけて方形周溝墓や小円墳が造られるようになる。辻の西遺跡（1・2次調査）や立山山古墳群がこれに挙げられ、比較的小さな墓域の中で造墓活動を行っていることがわかる。5世紀前半になると八女丘陵上に大規模な古墳が次々に築造される。所謂、筑紫君一族が築いた八女古墳群であり、その初現は広川町所在の石人山古墳（108m）である。内部主体たる初期横穴式石室には直弧文を浮き彫りした家型石棺が納められており、最古級の装飾古墳としても知られる。5世紀後半代になると八女古墳



第2図 吉書田遺跡・水町遺跡・大石本遺跡調査位置図 (1 / 2,500)

群中から大型前方後円墳は姿を消す。しかし、これを補完するように瑞王寺古墳（直径26m、円墳）、欠塚古墳（墳丘長45m 前方後円墳）、本6号墳（直径41m 円墳）、釘崎2号墳（墳丘47m 前方後円墳）、丸山古墳（墳丘長55m 前方後円墳）等の古墳が次々に築造される。しかし、50m前後の中規模から逸脱しない点に、首長墓系列の一時的な不在を読み取ることができる。6世紀前半～中頃になると、筑紫君全盛期を築いた磐井が築造した岩戸山古墳（墳丘長135m 前方後円墳）が出現する。日本書紀などにある磐井の乱後は、それまで単一的に連なっていた首長墓系譜が岩戸山以後は乗場古墳（墳丘長約70m 前方後円墳）、善蔵塚古墳（墳丘長約90m 前方後円墳）、鶴見山古墳（墳丘長87.5m 前方後円墳）など、複数の大型前方後円墳が出現し、首長系列の複数化を暗示している。6世紀後半代になると直径10m前後の小円墳が爆発的に増加すると共に、後半～末頃には前方後円墳は完全に姿を消し、童男山古墳（直径48m 円墳）などの大型円墳が出現する。しかし7世紀初頭以後、これらの古墳に後続する大型古墳は全く見当たらず、歩調を合わせるかのように後期群集墳も姿を急速に消してゆく。これらの現象を最後として、八女古墳群は終焉を迎えることとなる。

III 調査の内容

1 吉書田遺跡 遺跡の概要

吉書田遺跡は八女市新庄字吉書田に位置し、同年（昭和62）年度に東側の水町遺跡を調査している。圃場整備を行うに当たって水路部分となり削平される個所が調査区とされている。

1 地点〈第3図〉

南側の調査区を1地点として調査を行った。1地点は前年（昭和61）年度に調査した宮ノ后遺跡の北側に位置する。

遺構と出土遺物

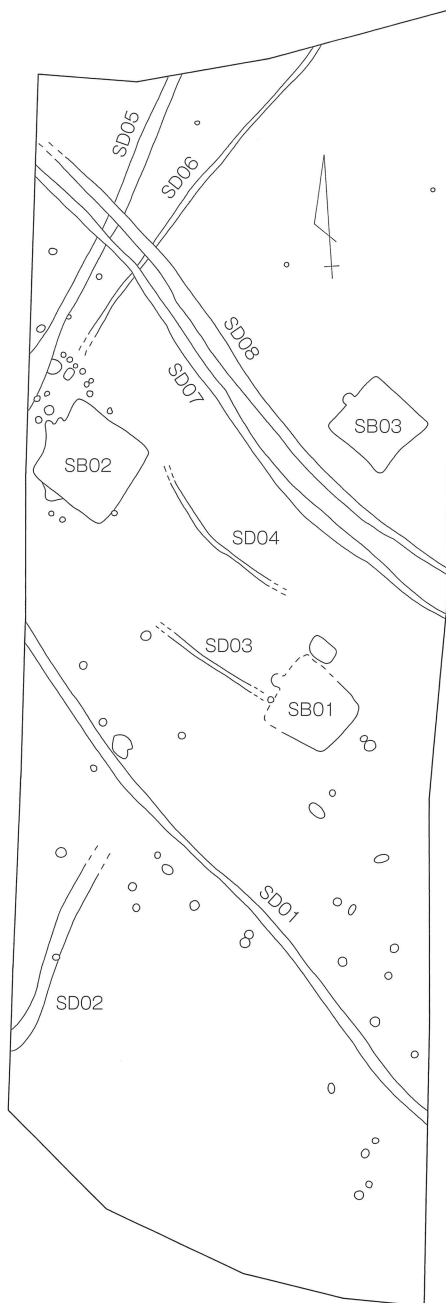
1地点は竪穴住居3軒、溝状遺構8本が見つかった。竪穴住居はいずれも北西壁中央にカマドを設け、方角も同じくし、10°以内に収まると考えられる。2号及び3号竪穴住居は南東側中央に隅丸の方形を意識したプランの屋内土壇を設けている点も共通している。

竪穴住居（SB）

吉書田遺跡では3軒の竪穴住居が検出された。いずれもカマドが設けられている。

1号竪穴住居〈第4図〉

調査区中央南東寄りで検出した竪穴住居である。削平をうけていると考えられ、検出状況は悪い。北西壁中央外側にカマドが設けられる。北東側壁面がはっきりしないがプランはほぼ正方形で、主軸長は約3.1m、床面積は約8.9㎡、カマドを通る線を主軸として方位N-53°-Wと推測される。柱穴は確認できていない。支石などは確認できなかった。この住居の北西側に近接する形で方形の土壇が確認できた。長軸長1.12m、短軸長0.82mを測る。底部は住居の床面より0.2mほど低い。住居との関係については考えられる要素が少なくわからない。



第 3 図 吉書田遺跡 1 地点 遺構配置図
〔1／300〕

12 は壺で口径 16.5 cm、器高 29.6 cm、13 は甕の口縁部片、14～19 は坏で、坏はいずれもカマド周辺から出土している。

溝状遺構（SD）

溝状遺構は出土遺物もなく、竪穴住居との関係を考えるには情報が少ない。

1 号溝状遺構〈第 7 図〉

調査区南側を北西から南東方向へ走る溝状遺構で、幅約 0.44 m、深さ約 0.12 m。

出土遺物〈第 9 図〉

1 号竪穴住居からは遺物として土師器と須恵器片がわずかに出土している。1 は土師器の坏の口縁部片で復元口径 15 cm、胎土は精選されている。2 は土師器の坏片、復元径 15.8 cm、3 は削り出し高台の須恵器の底部。

2 号竪穴住居〈第 5 図〉

調査区西側で検出した竪穴住居である。北西壁中央にカマドが設けられる。北側コーナーが張り出した感じの方形プランだが、平面図を作成する際に錯誤があった可能性が見受けられ、おそらく一辺約 3.6 m のほぼ正方形のプランであると考えられる。カマドを通る線を主軸として方位 N-55°-W を測る。面積は約 13.1 m² である。柱穴は確認できない。カマドは支石が確認でき、南東側、カマドと反対の壁面中央にやや隅丸の方形を意識したプランの屋内土壇がある。

出土遺物〈第 10 図〉

2 号竪穴住居跡からは数点の土師器片が出土している。4、5 は壺、6 は甕の口縁、7～11 は坏。

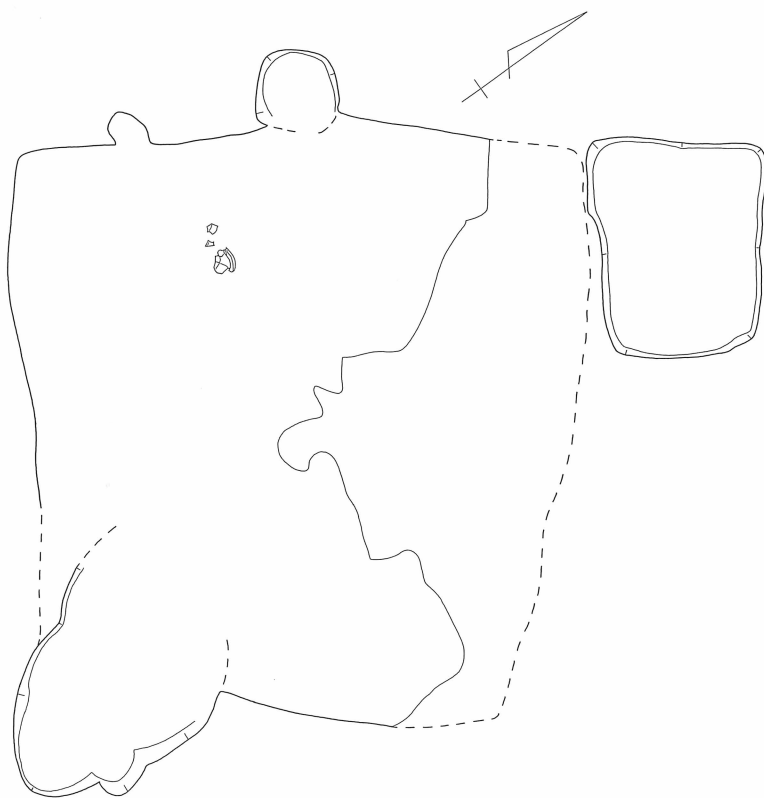
3 号竪穴住居〈第 6 図〉

調査区東側北寄りで検出した竪穴住居である。北西側の壁中央にカマドが設けられるのは他のこの遺跡で検出された住居と同じである。一辺約 2.81 m の正方形プランで、カマドを通る線を主軸として N-48°-W、面積は約 11.1 m² を測る。柱穴は確認できず、中央に土壇がある。カマドと反対側の南東側壁面中央に土壇がある点は 2 号竪穴住居と共通である。

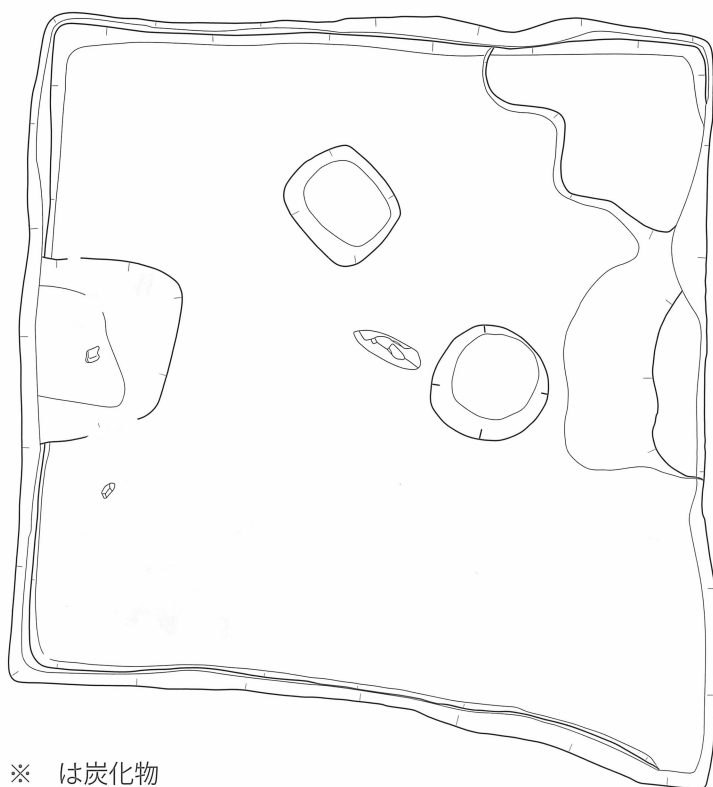
出土遺物〈第 11 図〉

3 号竪穴住居跡からは土師器が複数点出土している。

第 4 図
吉書田遺跡 1 地点
1 号竪穴住居
〔1／40〕

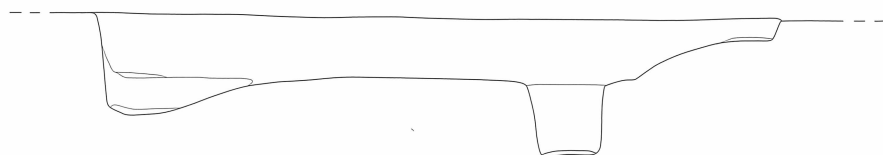


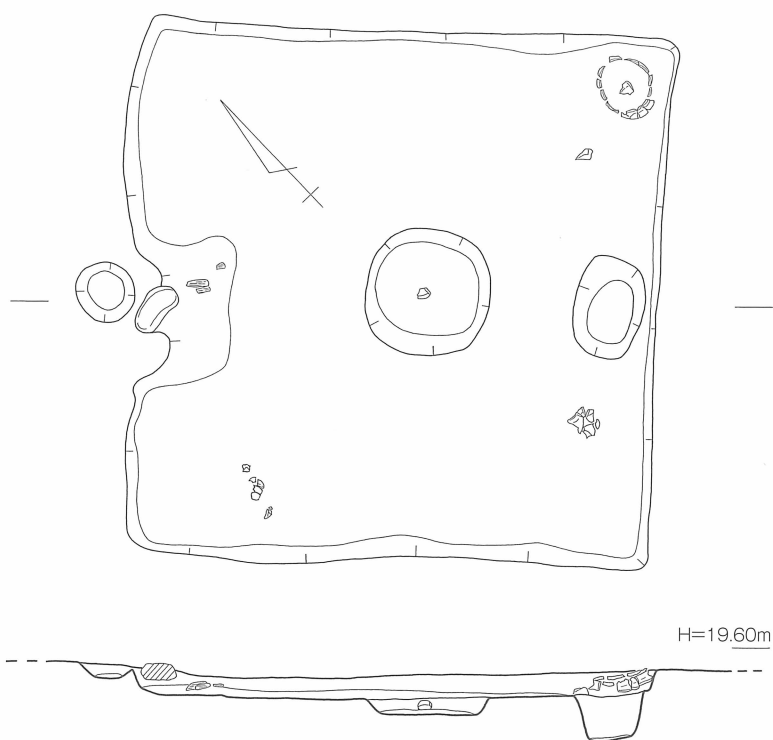
第 5 図
吉書田遺跡 1 地点
2 号竪穴住居〔1／40〕



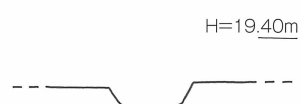
※ は炭化物

H=19.60m





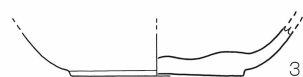
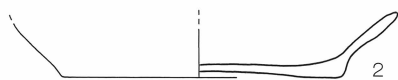
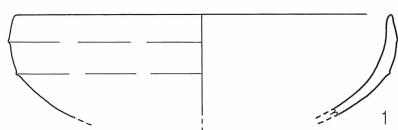
第 6 図
吉書田遺跡 1 地点 3 号竪穴住居
〔1/40〕



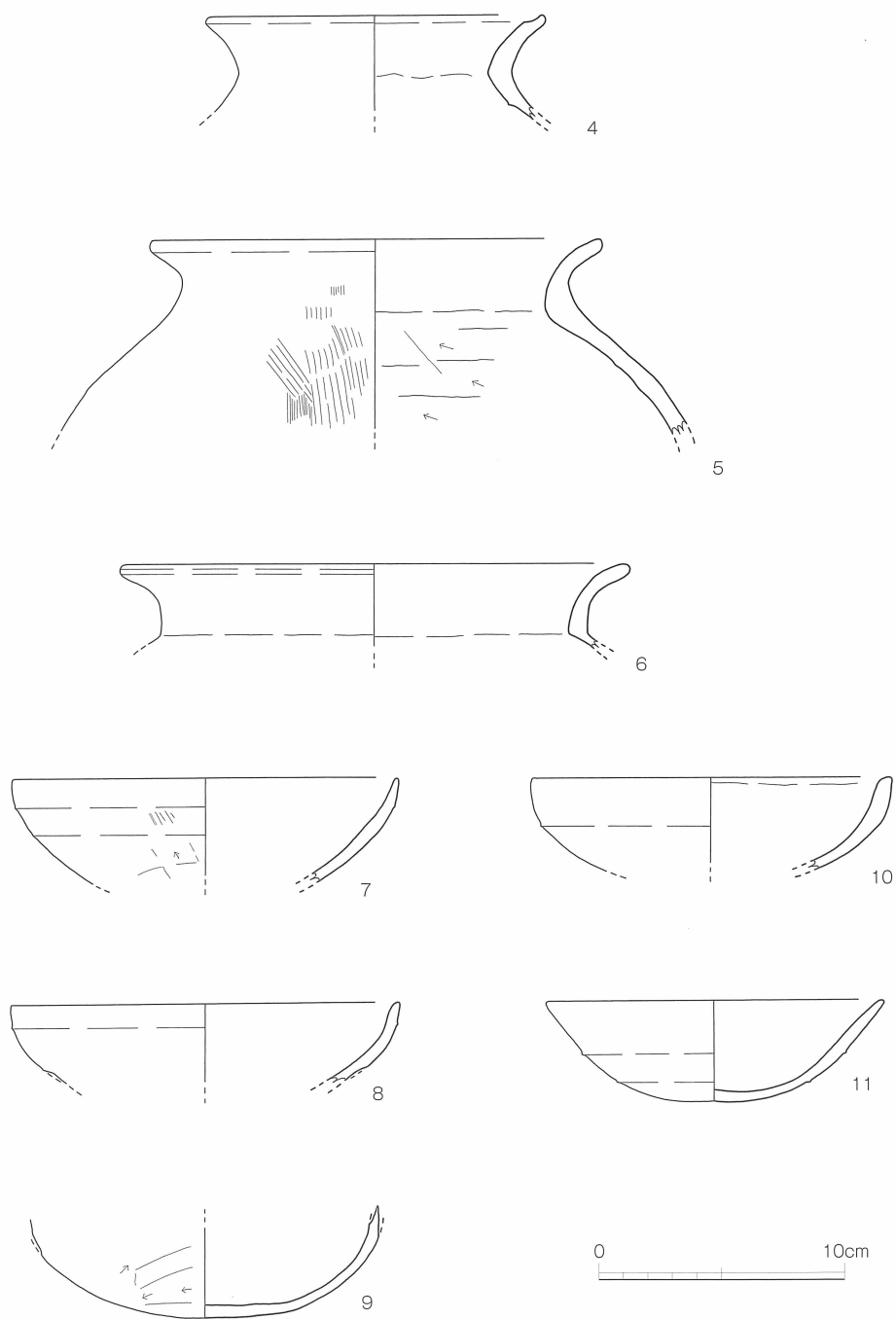
第 7 図
吉書田遺跡 1 地点 1 号溝状遺構断面図
〔1/40〕



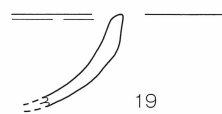
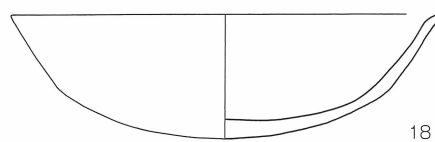
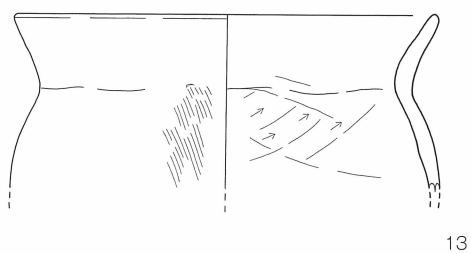
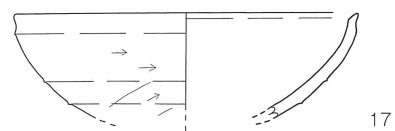
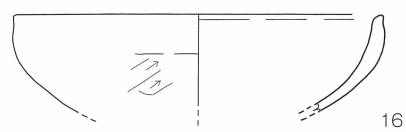
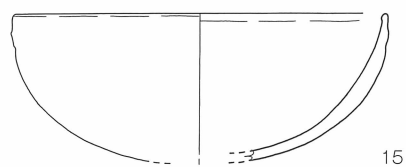
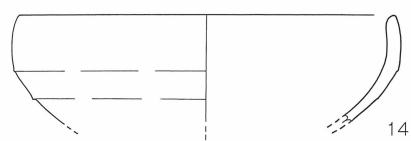
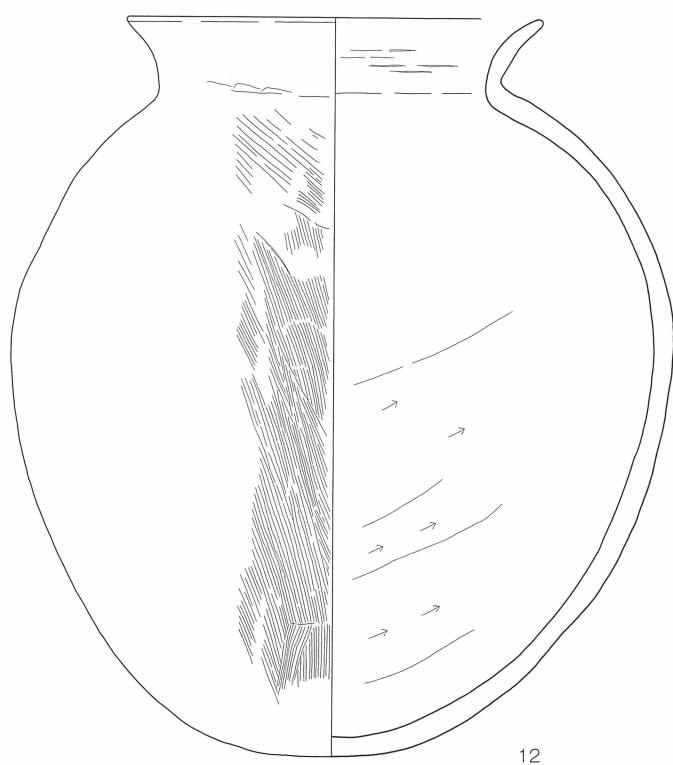
第 8 図
吉書田遺跡 1 地点 7 号・8 号溝状遺構断面図
〔1/40〕



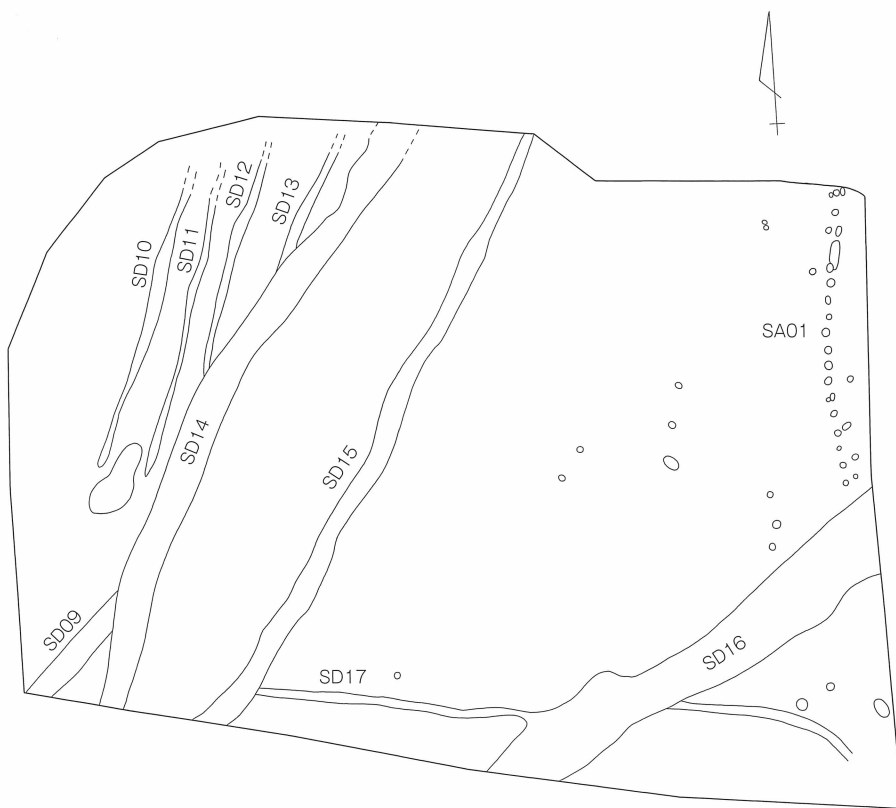
第 9 図
吉書田遺跡 1 地点
1 号竪穴住居出土土器実測図
〔1/3〕



第10図 吉書田遺跡1地点 2号竪穴住居出土土器実測図〔1／3〕



第 11 図 吉書田遺跡 1 地点 3 号竪穴住居出土土器実測図〔1／3〕



第12図 吉書田遺跡2地点 遺構配置図〔1/300〕

2号溝状遺構

調査区南西隅から北側に伸びる溝状遺構で、1号溝状遺構と交わるころまでは検出できていない。

3・4号溝状遺構

1号竪穴住居と2号竪穴住居の間で検出された溝状遺構である。検出状態が悪いのか、はっきりしない。

5・6号溝状遺構

調査区北側から南西方向に延びる溝状遺構で、7・8号溝状遺構に切られる。

7・8号溝状遺構〈第8図〉

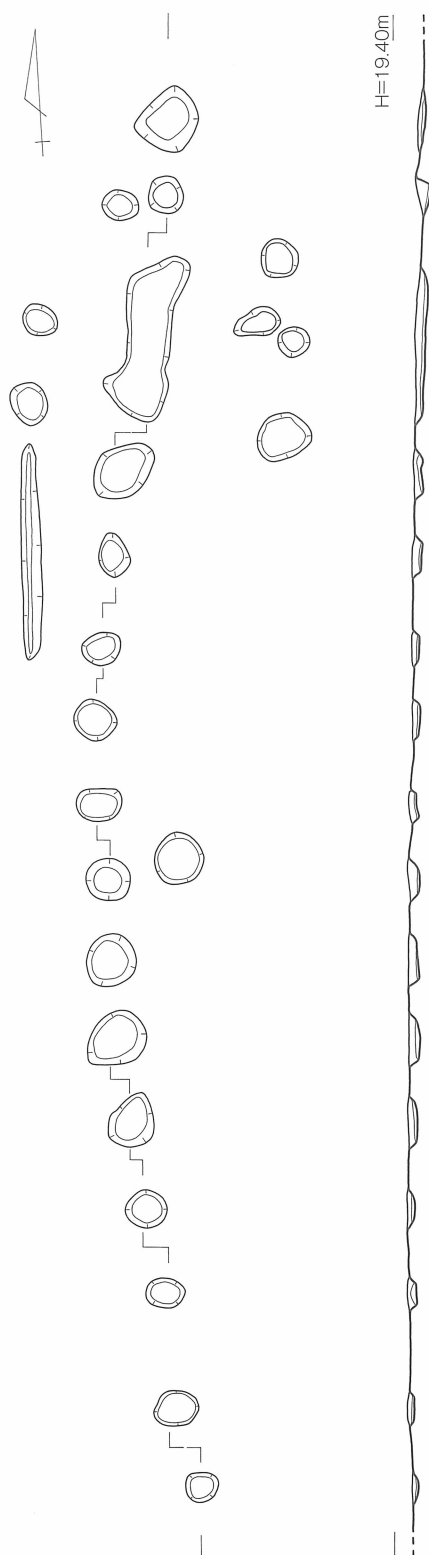
調査区北側を1号溝状遺構とほぼ平行に走る溝状遺構で、7号溝状遺構は幅0.69m、深さ0.06m、8号溝状遺構は幅0.46m、深さ0.07mである。

2地点〈第12図〉

吉書田遺跡2地点は1地点の北側に位置し、水町遺跡の西側に隣接する。

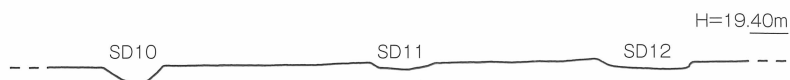
1号柵列状遺構（SA）〈第13図〉

調査区の北東側に南北方向に走る柵列状の遺構で、長さ約11mである。柱間の平均は17本として考えると約0.64mである。場所によって0.3m～1.1m程度の幅を持って2列となる個所がある。直径は平均約0.4m、深さは約0.07m程度で共通している。直線ではなく、やや西側へ弓状に膨らむ。16号溝状遺構によって切られる。



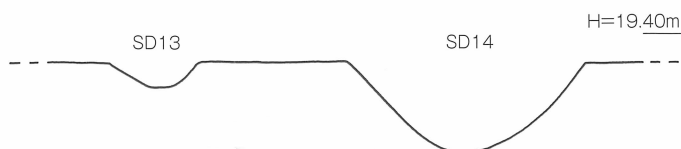
第13図

吉書田遺跡2地点 1号柵列状遺構
〔1/60〕



第14図

吉書田遺跡2地点10号・11号・12号溝状遺構断面図
〔1/40〕



第15図

吉書田遺跡2地点 13号・14号溝状遺構断面図
〔1/40〕



第16図

吉書田遺跡2地点 15号溝状遺構断面図
〔1/40〕

10・11・12・13・14・15号溝状遺構〈第14・15・16図〉

調査区の西側に並ぶ溝状遺構で、10・11・12・13号溝状遺構はほぼ平行で北北東から南南西に走り、幅は0.3m～0.5mで、深さは深いところで約0.6mである。

12・13号溝状遺構は14号溝状遺構に切られる。14号溝状遺構は幅約1.3m、深さ0.5m、15号溝状遺構は幅0.9m、深さ0.3m、やや台形の断面を呈する印象を受ける。概要報告では16号溝状遺構はこの調査区で最も幅が広く深さもある溝状遺構で、土師器が出土しているとのことであるが、遺物が残っていないので詳細は不明である。

2 水町遺跡

遺跡の概要

水町遺跡は八女市新庄字水町に位置し、吉書田遺跡2地点の農道をはさんだ東側に隣接し、圃場整備により削平される1,500㎡について、昭和62年7月28日から昭和62年9月8日にかけて調査を実施した。

遺構と出土遺物

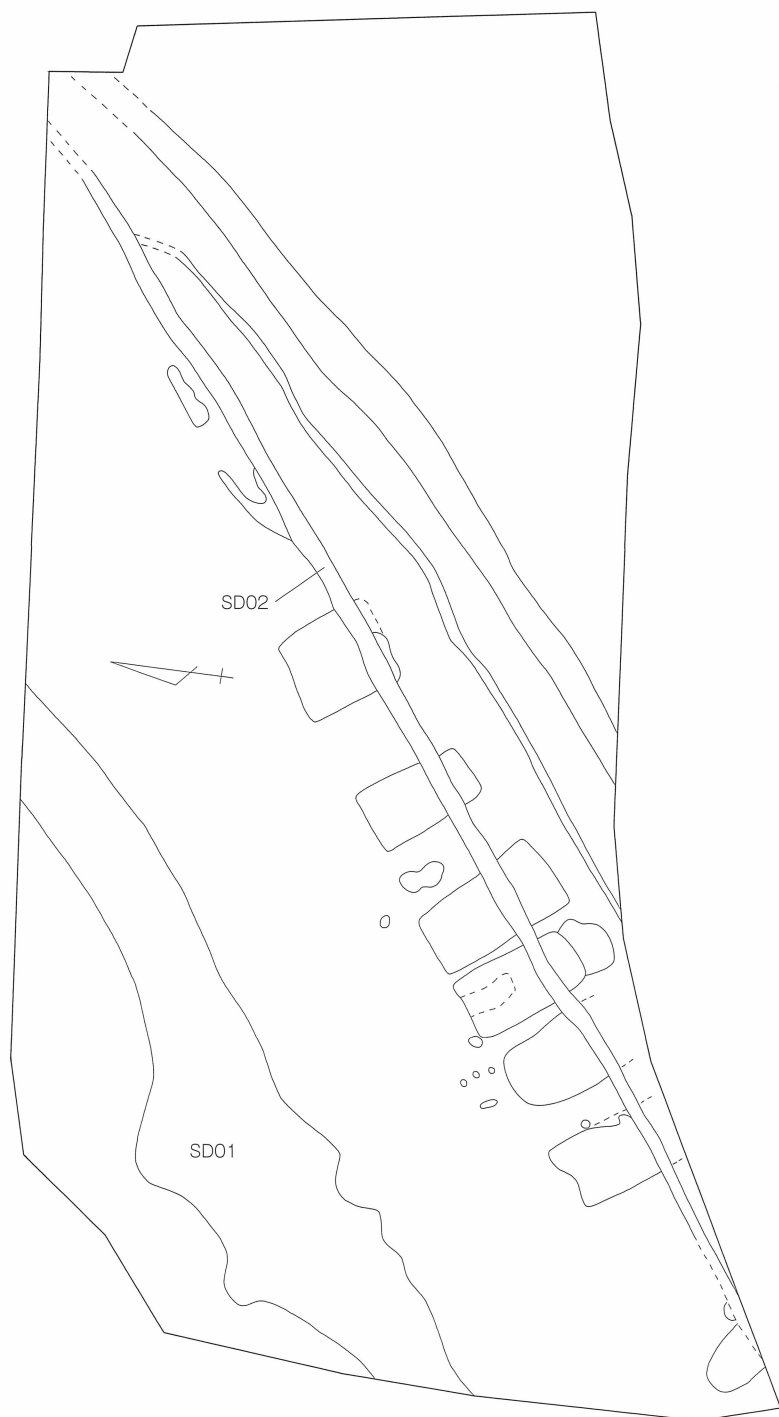
のこされた図面は遺構に対して付番されていなかったもので、幅などから推測し、新たに番号を付けていることを先に断わっておく。方形のプランを呈する遺構が7つ、2号溝状遺構遺構に切られる形で近接して並ぶ。長軸方位はN-38°-WからN-42°-Wの間に収まる。遺構の配置から竪穴住居とは考えにくい

1号溝状遺構〈第18図〉

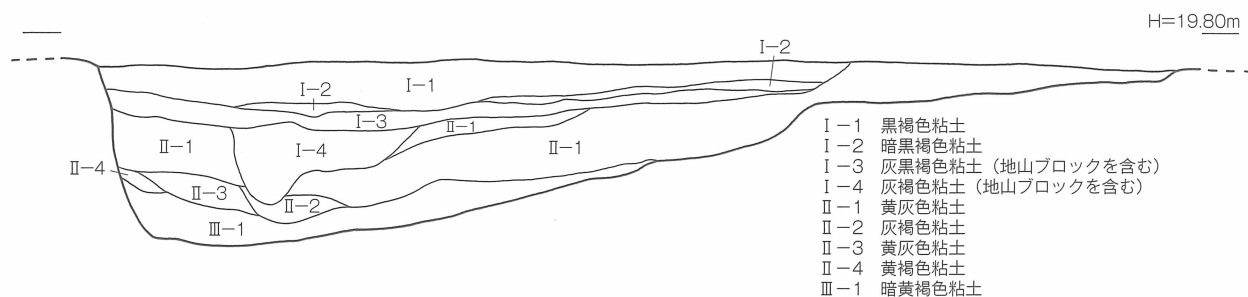
調査区西側を北東から南西側に走る溝状遺構である。最も幅の広いところで約5.6m、深さは約1mである。断面は北から南壁面に向かって緩やかに深くなり、土層図から推測すると少なくとも3回に分けて堆積していったと考えられる。

2号溝状遺構〈第19図〉

幅0.9m、深さ0.08mで、方形プランを呈する遺構を切るの、概要報告におけるSD17とはこの溝状遺構のことであろう。概要報告で12世紀頃の土師器が出土したとある。



第17図 水町遺跡 遺構配置図〔1/300〕



第18図 水町遺跡 1号溝状遺構土層図〔1／40〕

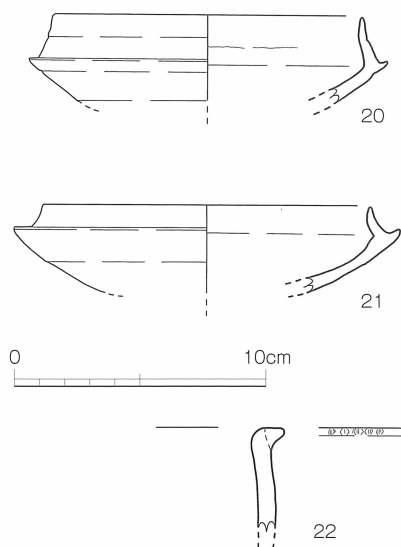


第19図
水町遺跡 2号溝状遺構断面図
〔1／40〕

出土遺物〈第20図〉

この遺跡で出土した遺物については、遺構番号が注記されていたものの、残された図面には遺構番号が付番されていなかった。さらに概要報告にある青磁片や土師器なども遺物の中に無く、弥生土器と須恵器片が3点残されているのみである。対応する付番を推測し、遺物の出土した遺構を掲載することも考えたが、それによって間違った認識がもたれることのほうが危険であると判断したので、一括して掲載する。

20・21は須恵器の坏身で20は復元口径12.6cm、21は14.6cmを測る。22は刻み目のある突帯が付く弥生土器片。



第20図
水町遺跡 出土土器 実測図
〔1／3〕

3 大石本遺跡

遺跡の概要

大石本遺跡は八女市新庄字大石本に所在する。この地区は水田面に伸びた微高地で、水田面からの比高1.5mをはかる。計画で水路によってこの微高地の先端部分が削平されることとなり、昭和62年11月4日から昭和62年11月14日にかけて415㎡を調査した。

遺構と出土遺物

1 地点〈第21図〉

1 地点という調査区については位置的な情報がなかったが、概要報告において微高地の先端部分で水路により削平される部分を調査したとあることと、調査区を撮影した写真に写る茶畑からおそらく2地点の北西側に隣接すると考えられる。調査区東側に柵列状にピットが並ぶがはっきりしない。

1号溝状遺構〈第22図〉

調査区の北側に東北東－西南西方向に走る溝で幅24cm、深さ4.2cm。

2 地点〈第23図〉

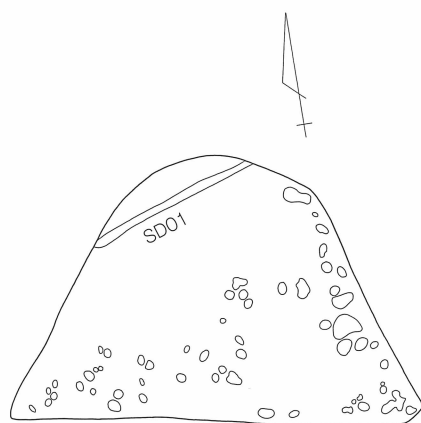
2 地点では多数のピットと2本の溝状遺構が検出された。2号溝状遺構は西側で西北西側に曲がる傾向を示す。この2号溝状遺構と3号溝状遺構に区画される西側と東側では、東側でピットが検出される密度が薄い。

2号溝状遺構〈第24図〉

調査区北側を西北西－東南東へ走る溝状遺構である。幅約0.7m、深さ約0.07m

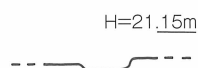
3号溝状遺構〈第25図〉

調査区南側を南北に走る溝状遺構である。幅約0.5m、深さ約0.12m



第21図

大石本遺跡1地点 遺構配置図〔1/300〕



第22図

大石本遺跡1地点 1号溝状遺構断面図
〔1/40〕



第23図

大石本遺跡2地点 遺構配置図

[1/300]



第24図

大石本遺跡2地点 2号溝状遺構断面図 [1/40]



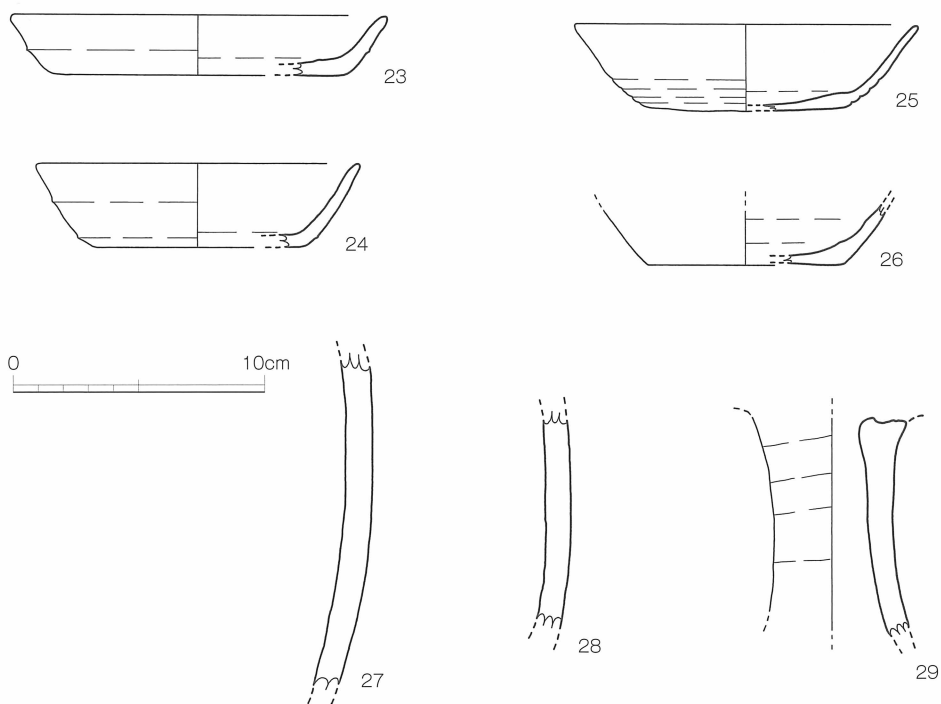
第25図

大石本遺跡2地点 3号溝状遺構断面図 [1/40]

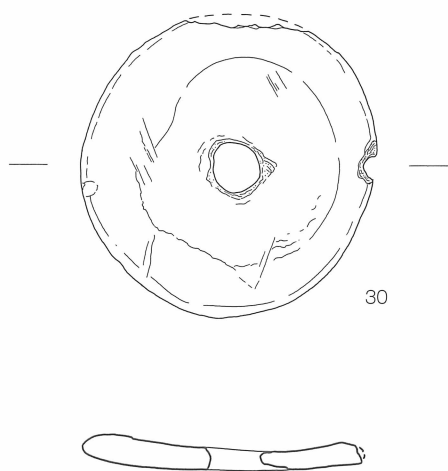
出土遺物〈第26図〉〈第27図〉

大石本遺跡2地点からは土師器、須恵器数点と石製紡錘車が出土している。情報に乏しいので残る遺物は極力掲載することにした。

23・24は土師器の坏片、25・26は須恵器の坏片、27・28は須恵器の甕か壺の破片、29は弥生土器の高坏の脚部、30は石製紡錘車、片岩製で最大径8.0cm、穿孔径1.2cmで中央部の穿孔部のほかに端部に0.4cm程度の穿孔跡がみられる。



第26図 大石本遺跡 出土土器実測図〔1／3〕



第27図
大石本遺跡 P-26〔1／2〕

図版

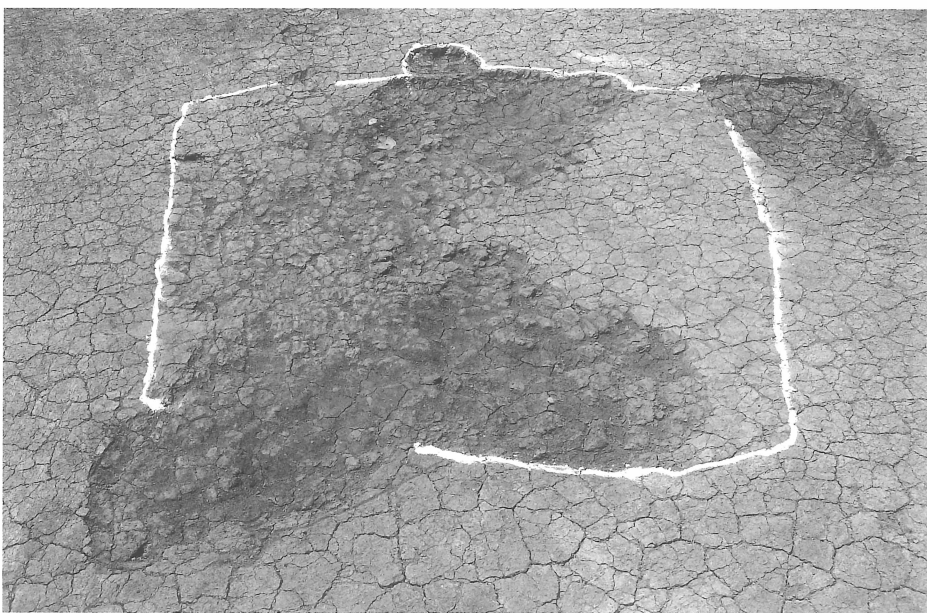
図版 1



1 吉書田遺跡 1 地点 作業風景（北東から）



2 吉書田遺跡 1 地点全景（南から）



3 吉書田遺跡 1 地点 1 号竪穴住居（南西から）



1 吉書田遺跡 1 地点 2 号竪穴住居遺物出土状況（南東から）



2 吉書田遺跡 1 地点 2 号竪穴住居カマド（南東から）



3 吉書田遺跡 1 地点 2 号竪穴住居（南東から）

図版 3



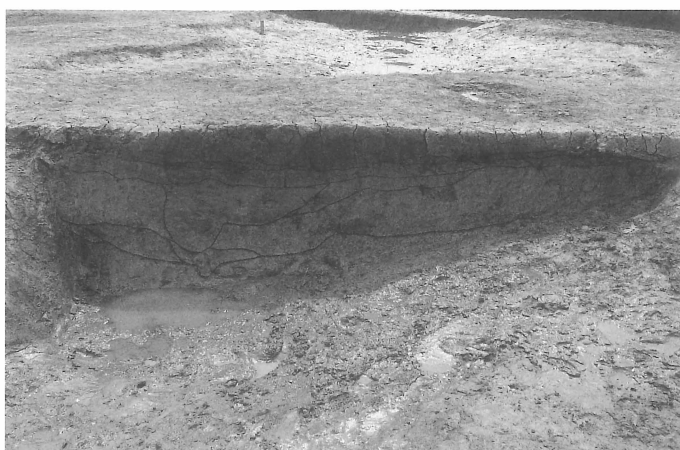
1 吉書田遺跡 2 地点 全景（南東から）



2 吉書田遺跡 2 地点 1 号柵列状遺構（北西から）



1 水町遺跡 全景（西から）



2 水町遺跡 1 号溝状遺構（北東から）



3 水町遺跡 2 号溝状遺構（南西から）



4 水町遺跡 4 号溝状遺構

図版 5



1 大石本遺跡 1 地点 全景（東から）



2 大石本遺跡 2 地点 全景（北から）



3 大石本遺跡 2 地点 2 号溝状遺構（北から）

出土遺物一覧表

遺跡名	地点	遺物 番号	掲載 番号	出土遺構	器高 (cm)	器種	口径 (cm)	残存	種類	焼成	色調 (外側)	色調(内側)	胎土	調整 (外側)	調整 (内側)	底径 (cm)	復元口径 (cm)	復元底径 (cm)
吉書田	1地点	3	1	1号竪穴住居跡		坏		口縁部片	土師器	やや良好	淡黄茶色	淡黄茶色	精選されている	ケズリ、ナデ	ナデ	15		
吉書田	1地点	2	2	2号竪穴住居跡		坏		2/3	土師器	やや不良	淡乳褐色	淡乳褐色	赤色粒子を含む	ケズリ	ナデ	11		
吉書田	1地点	4	3	1号竪穴住居跡		坏		底部片	須恵器	堅緻	淡灰色	淡灰色	砂粒を含む	ナデ	ケズリ、ナデ		7.0	
吉書田	1地点	7	4	2号竪穴住居跡		甕		口縁部片	土師器	やや良好	淡黄褐色	淡黄褐色	小石が混ざる	ナデ、ハケ目	ナデ		13.6	
吉書田	1地点	11	5	2号竪穴住居跡		甕		口縁部片	土師器	やや不良	淡乳褐色	淡灰褐色	細砂粒を含む	口縁部ナデ、ハケ目	体部ケズリ、口縁ナデ		18.4	
吉書田	1地点	6	6	2号竪穴住居跡		甕		口縁部細片	土師器	やや不良	淡灰褐色	淡灰褐色		ナデ	ケズリ、ナデ		20.8	
吉書田	1地点	14	7	2号竪穴住居跡		坏		口縁部片	土師器	やや不良	淡黄褐色	黄茶褐色	細砂粒を含む	ナデ	ナデ		16.0	
吉書田	1地点	5	8	2号竪穴住居跡		坏		口縁部片	土師器	やや良好	暗茶褐色	暗茶褐色	精選されている	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ		16.0	
吉書田	1地点	9	9	2号竪穴住居跡		坏		底部片	土師器	やや不良	黄茶褐色	淡黄茶褐色	砂粒を含む	ヘラミガキ	ヘラミガキ			
吉書田	1地点	10	10	2号竪穴住居跡		坏		口縁部細片	土師器	やや良好	茶褐色	茶褐色	細砂粒を含む	ナデ	ナデ			
吉書田	1地点	8	11	2号竪穴住居跡		坏		1/5	土師器	やや不良	淡黄茶褐色	茶褐色	精選されている	ヘラケズリ、ミガキ	ミガキ	13.8		
吉書田	1地点	1	12	3号竪穴住居跡	29.6	甕	16.5	1/2	土師器	やや良好	暗灰褐色	暗灰褐色	10mm大の小石が混ざる	体部ハケ目、口縁部ヨコナデ	体部ケズリ、口縁部ヨコナデ			
吉書田	1地点	20	13	3号竪穴住居跡		甕		口縁部片	土師器	やや不良	淡乳灰褐色	淡乳灰褐(黒斑あり)	1～8mm大の小石が混ざる、砂粒を多く含む	ナデ、ハケ目	ナデ		16.8	
吉書田	1地点	12	14	3号竪穴住居跡		坏		口縁部片	土師器	やや良好	暗茶褐色	暗茶褐色	細砂粒を含む	ケズリ、ナデ	ナデ		15.0	
吉書田	1地点	17	15	3号竪穴住居跡		坏		1/2	土師器	やや良好	茶褐色	淡黄褐色	砂粒を含む	ヘラミガキ	ヘラミガキ		14.8	
吉書田	1地点	19	16	3号竪穴住居跡		坏		口縁部片	土師器	やや良好	暗茶褐色	暗茶褐色	赤色粒子が混ざる	口縁部近くヨコナデ、体部ナデ	ミガキ		14.8	
吉書田	1地点	16	17	3号竪穴住居跡		坏		口縁部片	土師器	やや良好	淡褐色(黒斑あり)	暗茶色	細砂粒を含む	ケズリ、ナデ	ナデ		13.8	
吉書田	1地点	18	18	3号竪穴住居跡		坏		1/3	土師器	やや良好	淡黄茶褐色	淡黄茶褐色	細砂粒を含む	不定方向のナデ	ナデ		17	
吉書田	1地点	13	19	3号竪穴住居跡		坏		口縁部片	土師器	やや不良	茶褐色	茶褐色	細砂粒を含む	ナデ	ナデ			
水町		3	20	不明		杯身		1/4	須恵器	やや不良	淡灰白色	淡灰白色	砂粒を含むが精選されている	ヘラケズリ、ヨコナデ	ヨコナデ	12.6		
水町		2	21	不明		蓋杯		1/4	須恵器	やや不良	淡灰白色	淡灰白色	3mm大の小石を含む	ヘラケズリ、ヨコナデ	ヨコナデ	14.6		
水町		1	22	不明		甕		口縁部細片	弥生土器	不良	暗黄褐色	淡黄褐色	1～4mm大の小石が混ざる					
大石本	2地点	4	23	P-82		杯		1/8片	土師器	やや良好	明黄褐色	明黄褐色		ヘラケズリ、ナデ、イトギリ	ナデ	15		
大石本	2地点	2	24	P-23		杯		底部片	土師器	やや良好	茶褐色	茶褐色	赤色粒子が混ざる	ヘラケズリ、ナデ	ナデ		8.6	
大石本	2地点	1	26	P-8		坏		底部片	須恵器	堅緻	灰白色	灰白色	3mm大の小石が混ざるが精選されている	ナデ	ヘラケズリ	8		
大石本	2地点	5	27	P-81		不明		破片	須恵器	堅緻	淡灰色	淡灰白色	精選されている	格子状のタキ	同心円状のタキ			
大石本	2地点	6	28	P-14		不明		破片	須恵器	堅緻	暗灰色	淡灰白色	精選されている	格子状のタキ	同心円状のタキ			
大石本	2地点	7	29	P-26		高杯		脚部片	土師器	やや良好	淡茶褐色	淡茶褐色	砂粒を含む	ケズリ、ナデ	ナデ			
大石本	2地点	8	30	P-26					石製品									

図版 6



[1] 吉書田遺跡 1 地点 1 号竪穴住居



[2] 吉書田遺跡 1 地点 1 号竪穴住居



[3] 吉書田遺跡 1 地点 1 号竪穴住居



[4] 吉書田遺跡 1 地点 2 号竪穴住居



[5] 吉書田遺跡 1 地点 2 号竪穴住居



[6] 吉書田遺跡 1 地点 2 号竪穴住居



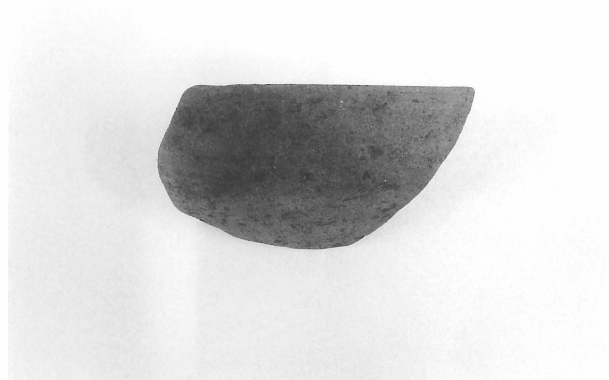
[7] 吉書田遺跡 1 地点 2 号竪穴住居



[8] 吉書田遺跡 1 地点 2 号竪穴住居



[9] 吉書田遺跡 1 地点 2 号竪穴住居



[10] 吉書田遺跡 1 地点 2 号竪穴住居

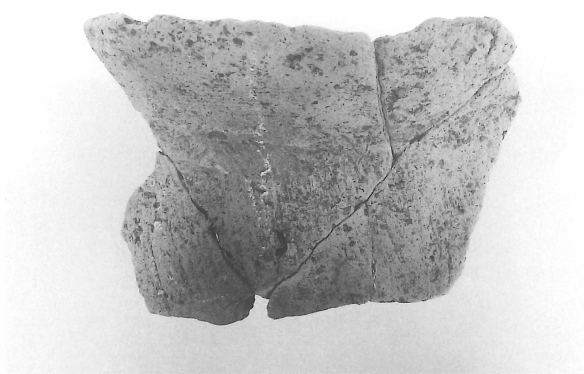


[11] 吉書田遺跡 1 地点 2 号竪穴住居



[12] 吉書田遺跡 1 地点 3 号竪穴住居

図版 8



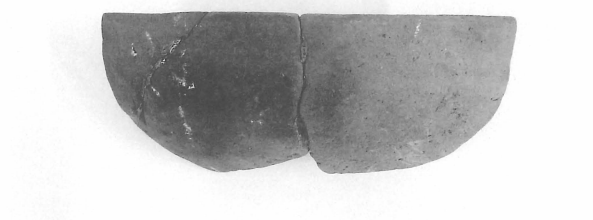
[13] 吉書田遺跡 1 地点 3 号竪穴住居



[14] 吉書田遺跡 1 地点 3 号竪穴住居



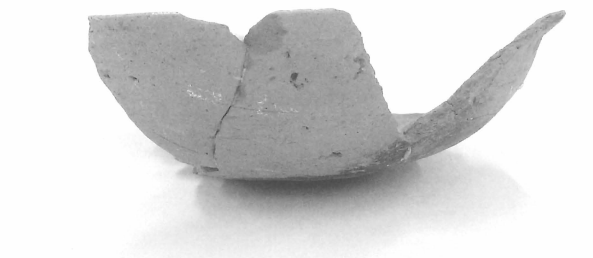
[15] 吉書田遺跡 1 地点 3 号竪穴住居



[16] 吉書田遺跡 1 地点 3 号竪穴住居



[17] 吉書田遺跡 1 地点 3 号竪穴住居



[18] 吉書田遺跡 1 地点 3 号竪穴住居



[19] 吉書田遺跡 1 地点 3 号竪穴住居



[20] 水町遺跡



[21] 水町遺跡



[22] 水町遺跡



[23] 大石本遺跡 2 地点



[24] 大石本遺跡 2 地点

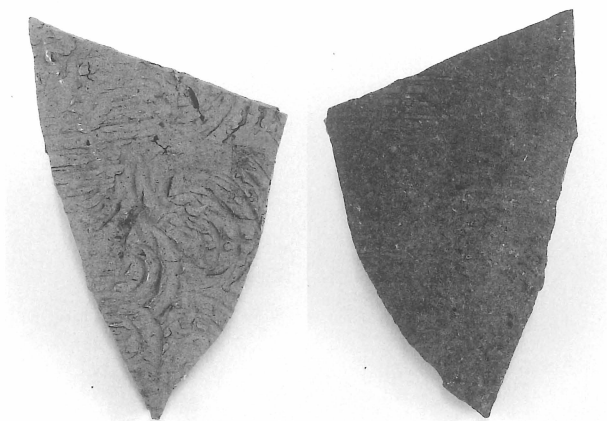
図版 10



[25] 大石本遺跡 1 地点



[26] 大石本遺跡 1 地点



[27] 大石本遺跡 2 地点



[28] 大石本遺跡 2 地点



[29] 大石本遺跡 2 地点



[30] 大石本遺跡

報告書抄録

ふりがな	やめしないいせきぐん2								
書名	八女市内遺跡群2								
副書名	福岡県八女市新庄所在遺跡の発掘調査報告書								
シリーズ名	八女市文化財調査報告書								
シリーズ番号	105集								
編著者	永田寧								
編集機関	八女市教育委員会								
所在地	八女市本町647								
発行年月日	2014年3月31日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間		調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号			開始	終了		
キッショウダイヤキ 吉書田 遺跡	やめしんじょう あざ きっしょうだ 八女市新庄 字 吉書田	40210		33° 11′ 53.88″	130° 31′ 54.48″	昭和62年7月1日	昭和62年8月7日	1,500	圃場整備
みずまちいせき 水町遺跡	やめしんじょうあざみずまち 八女市新庄字水町	40210		33° 11′ 56.09″	130° 31′ 56.89″	昭和62年7月28日	昭和62年9月8日	1,500	圃場整備
おおいしもといせき 大石本遺跡	やめしんじょうあざおおいしもと 八女市新庄字大石本	40210		33° 11′ 48.19″	130° 32′ 15.87″	昭和62年11月4日	昭和62年11月14日	415	圃場整備
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項	
吉書田遺跡	集落跡	古代		竪穴住居、柵列、溝		土師器、須恵器			
水町遺跡	集落跡	古墳時代		溝		須恵器、弥生土器			
大石本遺跡	集落跡	弥生時代、古代		柱穴		弥生土器、須恵器、石製紡錘車			

Y a m e

八女市内遺跡群 2

八女市文化財調査報告書 第 105 集

平成26年 3 月

発行 八女市教育委員会
八女市本町647

印刷 橋爪印刷
八女市吉田1899-1